

ムダとり

2005年2月20日
(琉球新報日曜評論)

最近、お客さんを訪問して時々話すことは、「やはり、経費の20~30%はムダがある筈です。徐々にとって行かないと---」、ところで、お客さんの会社はほとんどが黒字会社である。

会社の人は、「利益も計上していますし、そんなにムダがありますかね？ 必要なものまでとるとなると---」

「ありますね。もっと儲けても罰は当たらないし、支出の中に×があるでしょう。」ムダとりが必要ですね、というような話になる。

「ムダとり」とは有名な経営書（山田日登志著）のタイトルである。

丸山春美さんという人の名を聞いて、その著書も読んで見た。有名な節約アドバイザーである。30歳、もちろん美人、明るく、楽しく節約する女性である。

この方は、22歳の時、決心して、その当時20万円足らずの給料から、26歳までに6百万円を貯めたという。

その工夫の一つは、1ヶ月の全支出を書き出して、それらを○、△、×に分けた。即、節約可能な無駄な支出×が3万円もあったところから始めたという。必要なだけ買う、不必要なものは×である。そして△をどのようにスリム化するかが最大のポイントだと言う。

現在の会社の経費は一つのものではない。その中には、どうしても必要な経費と無くともよい無駄な経費が含まれていることは確かである。

ところが、日常の経営は、すべての経費は当然必要なものということをやらずに行われており、突然、無駄なものを省くと言っても難しい。それ相応の工夫が必要である。支出の中の『×』を見つけることは大きな工夫である。×を見つけて排除すれば、次に本命である『△』のスリム化にとりかかる。ここからが本番であり、本当の工夫の要るところである。

発想を変えることも大切である。経営は「捨てる」ことだという話はわかりやすい。

コストには、本来のコストとムダなコストが含まれている。必要なものだけで止めるために、無駄なものを見つけて節約するとなると、その無駄を見つけるのが難しい。最も確実なのは『捨てる』こととなる。物がある→仕事がある→人がいる→経費が出る。根本は物や人の存在である。人はともかくとして、物（設備、在庫、売掛金など）の存在がなければそれに対する経費もない。捨てる前に作らないこと

が正しいが、既に作ってしまえば、古いものはもちろん、新しいものでも、「捨てる、と、変わらない」と考えるべきである。

何を捨てるかと決めることは、経営者が現場へ出向いて、捨てるものを決める、考え方を考えることしかない。時間と労力と資金の恐るべき浪費、「ムダ」、それをとる『ムダとり』は現場でしかできない、経営者が現場へ出ることが、沖縄の中小企業にも出来る確実な経営改革の第一歩である。

買いすぎ、設備のやりすぎ、お金のかけすぎ、仕事のやり方のムダを、経営者が誰よりもわからなければならない。

古くは上杉鷹山、今では日産のゴーンさん、「出づるを制し、入るを図る」は、昔も、今も、経営の要諦である。それを如何にやりとげるかの工夫と努力が経営というものであろう。

これらの再建者は先ず、第一にムダとり、コストカットに目をつけた。経営改善のための奇手はない。当たり前のことをやり抜く外はない。上杉鷹山の大検令も、まずは、収入に見合う支出を実現することを第一の目的とした。

そして次に、支出を少なくして、収入を多くあげる。経費を下げて、売上を上げることの必要な会社は多い。その時にそれを実行する人材の重要性がわかる。会社というものは、試行錯誤のくりかえしと経営者の工夫次第である。